

# 自分の保育を振り返って

堀川 仁美

私は、大学を卒業後、都内の私立幼稚園で三年間、持ち上がりでクラス担任を受け持ち、二十一名の卒園までを見届けた。その後、半年ほど保育の現場を離れていたが、現在の幼稚園で非常勤講師を募集するというお話をいただき、年度の途中から学年付きのフリーとして勤務して、一年半が過ぎた。

保育者としてはほんの駆け出しの未熟な私であるが、この場をお借りして、今の自分が、今までの自分の保育を振り返ってみて、フリーという立場で保

育に入っているからこそ気付けたこと、考えられたことなどを、書かせていただこうと思う。

私立幼稚園での一年目は、年少児十六名のクラスの担任になった。もう一つのクラスには、五年目の先輩保育者。そして、ベテランの保育者と一年先輩の保育者が、学年のフリーとしてついた。

その頃の私は、とにかくすべてが初めてなので、隣のクラスの保育者の見よう見まねをするしかな

かった。そして、子どもたちの要求に伝えていくことや、喧嘩の仲裁、様々な行事に向けての活動に、子どもたちを誘うことにはかりとらわれていた。先の見通しが持てぬまま、目の前のことに追われる日々だった。

ある時、園長から「自分の得意分野を見つけなさい。隣のクラスの先生が製作や外での遊びが得意なら、あなたはごっこ遊びを盛り上げるといい」というアドバイスを受けても、実際にどうしたらごっこ遊びを広げていけるのか、一体何をしたら盛り上がるのか、実感としてわからずにいた。

そんな私が、それでもなんとか日々保育を進めていくことができたのは、フリーの保育者が、子どもたちの遊びをつなげたり、広げたりする役割を積極的にしてくれたからである。

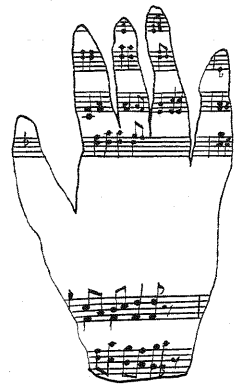
例えば、園庭にあった一人乗り自転車に乗りたいた人が増えると、駐車場や信号機を設定し、単に乗るだけでなく、他の人と順番を交替しやすくしてい

た。車には乗らない人には、信号機の係を任せることで、一つの遊びの流れに乗せていた。

また、保育室にあった『おおかみと七匹のこやぎ』の指人形に興味を示す人がいると、そこからごっこ遊びに展開させたり、『おおかみさん今何時?』という鬼ごっこにつなげていた。

私にとって、子どもたちの遊びのイメージを発展させていくことを目の前の実践を通して学んだのは、これが最初だったと思う。

二年目は、持ち上がって、年少の途中入園の人と、年中からの新入園の人を合わせて、二十三名のクラスを受け持った。もう一つのクラスは、前年度



フリーだった一年先輩の保育者が受け持ち、学年のフリーとしては、新任の保育者が一名ついた。しかし、三人とも経験が浅いので、園長から様々な指導を受けながら、試行錯誤していた。

ただ、一年間なんとか子どもたちと関係を築いていたこともあり、子どもたちへの願いや思いを意識しながら、自分がどう保育を展開していくかという自覚を、少しずつ持てるようになっていったと思う。

三年目もそのまま持ち上がったが、学年のフリーは、年度の途中から、他園で経験のある保育者がつくことになった。

私自身は、子どもたちとの関係が深まったことで、さらに子どもたちへの願いや思いを意識するようにはなった。だが、年長として幼稚園の中で果たすべき役割が大きいことを意識するあまりに、過去に年長児が活動してきた内容を受け継いで、取り組んでいくことに必死になってしまい、行事や、する

べき活動に縛られていたように思う。

日々保育をしていく中で、自分の不甲斐なさや未熟さを実感する度に、「私でない保育者が担任だったら、子どもたちの可能性をもっと広げてあげられたのではないか」「子どもたちが私のことを信頼して、好きでいてくれる以上、できる限りのことをするしかない」と気持ちが揺れていた。

しかし、園長からの叱咤激励や、保護者の方の支え、フリーの保育者の支えがあり、また、若い保育者が多かった為にお互いの悩みを相談し合える環境があったから、三年間、思い残すこともあったが、自分なりにやはり遂げることができたのだと思う。そして、年少から年長までずっとクラスを持ち上げることができたことで、子どもたちが経験したことがどうつながっていくのかを見届けていけたのは、私にとって、とても大きなことだった。

その後、現在の幼稚園の非常勤講師になって、最

初の年度は半年弱。次の年度は一年間、年長のフリーになり、今年度は、年中のフリーになった。以前から研修として公開保育を参観していた保育者のもとで、フリーとして動くことは、とても勉強になる。日々の実践の中で、担任保育者の動きを見たり、保育後の会話などから保育観を学ぶことができ。今までは、経験の豊富な保育者の保育を目の前で見る機会が少なかったので、一から勉強し直している気持ちである。

実感として学んだことの一つを挙げると、ごっこ遊びなどで使うものを作る時に、丁寧に作って大事に使えるようにすることである。家に持ち帰っても、また持ってきて幼稚園で使えるように言葉かけること、子どもの中で、家と幼稚園がつながるのだということを変更して実感した。

また、例えばお店やさんごっこが盛り上がり、そこで使う為に使ったものや材料は、お店やさんごっこが一時停滞しても、クラスの所有物として保存し

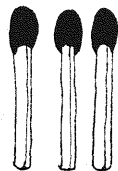
ておく。そうすることで、次に

誰かがお店やさんを始めたいと思った時に再び使えるものがあることで、始めやすくなった

り、最初に始めた人以外でも、誰でもが参加しやすい雰囲気を作ることができる。

年長のフリーに入っていた時は特に、子どもが作りたいものの素材を出す時に、それを出すことによつてどういう広がり期待できるか予想したり、今他の人が展開している遊びとつながっていけるかを考えて出す重要性を学んだ。先の見通しを持つことで、時には子どもがほしいままに出すのではなく、時には子どもがほしいままに出すのではなかったり、違う遊び方を提案する必要もあるのだ、と思った。

今までの私は、一人ひとりが作りたいもの、やりたいことに対応したり、その場その場での遊びを盛り上げることに一生懸命だった。そして、トラブルがあった時に、人と人との関係を援助することばか



りを考えていた。それも必要なことではあるとは思  
うが、もつと長期的な見通しをもって遊びと遊びを  
つなげることで、遊びの中で人と人をつなげてい  
く、という意識が足りなかった。

今思うと、行事に縛られてはいけないと頭の中  
は理解しながら、結局は行事に向けて活動してい  
くことばかりに気をとられていた。次にこれをしな  
ければいけない、あれを作らなければならぬ、とい  
うことで先の見通しを立てていた。

だから、子どもたちから出る遊びが、継続的なも  
の、発展性のあるものになりにくかったのだろう。  
私が年長の担任だった三学期には、行事やするべき  
活動が一通り終わり、子どもたちはそれぞれに落ち  
着いて、とてもよく遊んでいた。「もう自分が入る  
必要がないのではないか」と思ったくらいだ。だ  
が、それは誤解だったのではないか。きっと、私の  
関わり方次第で、発展していく遊びや人間関係が  
もつとあつたはずだ。

今の私は、フリーとしての経験もまだ浅いので、  
担任でいる時とはまた少し違う立場で子どもとどう  
関係を築き、どう遊びに関わっていくかを日々模索  
している。フリーとしての私の動きが、担任保育者  
の保育の妨げになってしまっていないかと不安に  
もなる。

しかし、保育後に掃除をしながらなどの少しの時  
間でも、その日の保育中であつた出来事や子どもの  
様子を話すことで、自分が関わった場面を担当保育  
者につなげることができ、また、担任保育者がこの  
後どうしているかと思っているかを聞くことができ  
る。この時間が、今の私にとって、とても貴重であ  
る。

実際に保育に携わりながら、その保育について具  
体的に学んでいける今の環境を大切にし、これから  
の自分の保育の実践の中で生かせるように努力して  
いきたい。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)